

令和四年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 定時制の課程（追検査）

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は **問四** までであり、1ページから13ページに印刷されています。
- 3 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 4 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の○の中を塗りつぶしなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番



(オ) 次の例文中の——線をつけた「の」と同じ意味で用いられている「の」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 兄の運転する車に乗った。

- 1 友だちの本を借りた。
 - 2 甘いものを食べるのが好きだ。
 - 3 用事があるので先に帰った。
 - 4 今日は風の強い日だった。
- (カ) 次の短歌を説明したものととして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

(著作権上の都合により省略)

岩田 正

- 1 窓から偶然見えた白い鳥が、遠く離れた国から海を渡ってやってきた鳥であることがわかったときの感動を、「海翔けてきし」と表現することで躍動的に描いている。
- 2 小さく弱々しかった白い鳥が、人に育ててもらったことで海まで飛べるほど立派に成長したことへの驚きを、「大きなる」と表現することで率直に描いている。
- 3 広い海を越えて飛んできた白い鳥が、窓の近くを横切ったときに感じた力強さや存在感を、「大きなる生きものとなり」と表現することで印象深く描いている。
- 4 自分の手元で大きくなるまで育てた白い鳥が、海へ飛んで行ってしまったことで生じた喪失感や悲しみを、「窓をよぎれり」と表現することで比喩的に描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学生の「ぼく」は、「カイト君」「ホットケ(健)^{けん}」「田崎理子(りこ)^{たざきりこ}」「リコリン」とバンドを組んで文化祭に向けて練習している。ある日、四人での練習中に「カイト君」と「ホットケ」がけんかになり、もみ合ったはずみで「ホットケ」は手をひねってしまった。「田崎」がその場をおさめたものの、「ぼく」はなにも言えないまま家に帰ってきた。

(著作権上の都合により省略)

(著作権上の都合により省略)

(著作権上の都合により省略)

(著作権上の都合により省略)

(升井 ますい 純子 じゅんこ 「Fができない」から。一部表記を改めたところがある。)

(ア) — 線1「しばらく水を出しっぱなしにして、ほうぜんとしていた。」とあるが、そのときの「ぼく」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 物事がうまくいかないことには慣れていると思っていたが、鏡に映った自分の顔を見てバンドの結束が壊れてしまったことに対して自分が落胆していると気づき、驚いている。

2 物事が悪い方向に進むのではないかと心配するあまり、自分がバンドの活動に後ろ向きになっていさせいで仲間の結束が壊れてしまったと思ひ込み、責任の重さを感じている。

3 物事は悪い方向に進むものだと自分自身に言い聞かせていたはずが、無意識のうちにバンドがうまくいくかもしれないと期待していたことに気づき、恥ずかしくなっている。

4 物事はうまくいかないとあきらめて最悪の状況を想定していたはずだが、バンドが悪い状態に陥ってしまったことに予想以上の衝撃を受け、なにも考えられなくなっている。

(イ) — 線2「母さんは、ふわっとふくらんだタオルをぼくに渡してくれた。」とあるが、そのときの「母さん」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 家にもどってきた「ぼく」が、呼びかけに返答せず反抗的な態度を取るのを見て、なにかにいらだっているのだろうと推測し、「ぼく」を落ちつけようとしている。

2 学校からもどってきた「ぼく」が、ぼんやりして食欲がない様子で見ているのを見て、寒さでかぜをひいてしまったのだろうと誤解し、「ぼく」のことを心配している。

3 学校から帰ってきた「ぼく」が、なにかに気を取られていて元気がない様子で見ているのを見て、帰宅前になにかあったのだろうと察し、「ぼく」のことを気遣っている。

4 家に帰ってきた「ぼく」が、いつもと違うそっけない態度を取るのを見て、なにか隠していることがあるのではないかと疑い、「ぼく」から話を聞こうとしている。

(ウ) — 線3「早く行け、走れ走れと、イチヨウの黄色がぼくの背中を押している。」とあるが、そのときの「ぼく」を説明した次の文中の I・II に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとから一つ選び、その番号を答えなさい。

「カイト君」と「ホットケ」の仲たがいのせいで I ことを防ぎたいと思う中で、II という気持ちが高まり、なんとか事態を好転させるために「ホットケ」に湿布を届けようと急いでいる。

1 I バンドがうまくいかなくなっていく II 自分が行動を起こそう

2 I 自分がどんどんみじめになっていく II バンドを元にもどそう

3 I 文化祭に出られなくなってしまう II ふたりに責任を取ってもらおう

4 I バンド内に自分の味方がいなくなってしまう II みんなの役に立とう

(エ) 線4 「お母さんと田崎がくすつと笑った。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「田崎」の行動を、友だちであるはずの「ぼく」が前もって予測できないことにあきれたから。
- 2 「ぼく」が「田崎」と同じように、「ホットケ」に湿布を届けに来たことがおもしろかったから。
- 3 「ぼく」がじきに見舞いに来るはずだという「田崎」の予想が見事に的中し、うれしかったから。
- 4 「田崎」のまねをして、「ホットケ」に湿布を渡したがる「ぼく」の強情さに困惑したから。

(オ) 線5 「ぼくがのろろしている」と、ホットケは怒ったように『渡して。』と、言った。」とあるが、そのときの「ホットケ」を説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「カイト君」への怒りはまだおさまっていないが、クラスのみんなの前で仲たがいを続けることを恥ずかしく思ったため、いらだちを「ぼく」にぶつけ、紛らわせようとしている。
- 2 「カイト君」と仲たがいでいることが広まってほしくないので、現場にいた「ぼく」にはいつもと同様にふるまってほしいが、「ぼく」が思い通りに行動してくれず、あせっている。
- 3 「カイト君」に湿布を渡してもらいたいが頼める人がおらず、仕方なく「ぼく」に任せようと思っではいるものの、「ぼく」がためらってなかなか行動しないため、はがゆく思っている。
- 4 「カイト君」のことは気がかりだが自分から直接湿布を渡したくはないので、事情を知っている「ぼく」に頼もうとしているものの、意図がうまく伝わらず、もどかしく思っている。

(カ) 線6 「男子ってほんと、やっかい。」とあるが、ここでの「田崎」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 意地を張り合って仲直りすることができない「カイト君」と「ホットケ」のことを、表面上は心配しながらも、互いに気持ちを探り合うふたりの様子をおもしろがっているような調子で読む。
- 2 互いを思いやる様子はあるが素直に仲直りできない「カイト君」と「ホットケ」のことを、表面上は面倒くさがりながらも、ふたりの関係に修復の兆候が見えたことに安心したような調子で読む。
- 3 仲たがいによって気持ちがすれちがったままの「カイト君」と「ホットケ」のせいで、クラスの雰囲気が悪くならないよう気を遣い、場を盛り上げようとわざと明るくふるまうような調子で読む。
- 4 本当は仲直りしたいはずなのに、なかなか歩み寄ることができない「カイト君」と「ホットケ」の幼さにあきれ、バンドの仲間として一緒に活動を続けることをあきらめたような調子で読む。

(キ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「ぼく」をはじめとするバンドの仲間が、互いを思いやる気持ちを行動で表すことで、ばらばらになりかけたバンドの結束が保たれる様子を、短い会話を重ねて軽快に描いている。
- 2 バンドに乗り気でなかった「ぼく」が、「ホットケ」を助けようと懸命に行動することによって、バンドの仲間とうちとけていく様子を、比喩を多用して生き生きと描いている。
- 3 「ぼく」をはじめとするバンドの仲間が、互いを大切にしたいという気持ちを、家族のはたらきかけによって伝え合っていく様子を、複数の人物の視点から立体的に描いている。
- 4 自分に自信を持てなかった「ぼく」が、積極的な「田崎」の影響を受けて前向きになり、バンドの仲間とともに成長していく様子を、平易な言葉遣いで親しみやすく描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(著作権上の都合により省略)

(著作権上の都合により省略)

(著作権上の都合により省略)

(西^ニ研^ケ「しあわせの哲学」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) コミュニティ＝共通の考えをもつ人々でつくられた集団。

ソクラテス＝紀元前五世紀頃の古代ギリシアの哲学者。

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|---|-------|---|-----|
| 1 | A | しかし | B | なぜなら | 2 | A | したがって | B | しかも |
| 3 | A | むしろ | B | たとえば | 4 | A | もちろん | B | もし |

(イ) 線1「職場でも同じようなことになるでしょう。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 仕事において互いが重視することを認めあえていけば、まわりの人を満足させるためにどのような仕事をすればよいのかがわかるようになるということ。
- 2 まわりの人と協力して取り組んだことが認められると、次は自分の力だけで仕事を成功させられるかどうか試してみたいという気持ちになるということ。
- 3 自分が懸命に取り組んだことが受け入れられると、いままで以上に努力してまわりの人に負けない結果をだしたいという気持ちが大きくなるということ。
- 4 互いの感情と考えを受けとめあうことができていけば、自ら進んで行動してまわりの人を驚かせるような成果をあげたいと考えるようになるということ。

(ウ) 線2「『空気を読む』』ということ」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 親の価値観と子どもの価値観が違う社会で、親の考えに沿って行動するために子どもが身につけた作法ではあるが、親のもとを離れた環境では適用できず、安心が継続する保証はない。
- 2 価値観が人によって大きく異なる社会で、子どもたちがまわりとうまく過ごすために身につけた作法ではあるが、表面的に認めてもらうことしかできず、安全が続くかわからない。
- 3 情報化が著しく進んだ社会で、子どもたちが言葉にしなくても考えを通じあわせるために身につけた作法ではあるが、親世代とは通じあえず、安心して過ごせる環境が限定されてしまう。
- 4 一人ひとり重視するものが異なる社会で、価値観を統一しようとする大人の意向に応じて子どもが身につけた作法ではあるが、誰の気持ちも尊重されず、安全な環境はつくりだせない。

(エ) —線3「私が授業で話しあいをしてもらうとき、いつもお願いするのは、『たずねる・確かめる』ことです。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「たずねる・確かめる」ことは、話しあいをする相手の考えだけでなく、考えにたどり着くまでに経験してきたことや感じたことまでとらえることに役立つと考えているから。

2 「たずねる・確かめる」ことは、話しあいをする相手に、自分が発言する内容だけでなく発言に込めた感情まで正確に理解してもらえると、役立つと考えているから。

3 「たずねる・確かめる」ことは、話しあいをする相手に、伝えるべき内容かどうかを発言する前に十分に考えたうえで伝達してもらえると、役立つと考えているから。

4 「たずねる・確かめる」ことは、話しあいをする相手の性格を分析し、どのような態度で話を聴けば相手が安心して話せるようになるのか見極めることに役立つと考えているから。

(オ) —線4「他者理解を通して自己理解が深まっています。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分では思いつかないことを他者が考えていると知ること、自分の中にも他者にはない考えが存在するという事に思ったり、独自性を尊重して生きていこうとするようになるということ。

2 他者の気持ちを正確に理解できるようになると、自分の発言や行動について他者がどのように感じているのかということに意識が向き、自分の行いを自発的に改められるようになるということ。

3 他者の気持ちや意見がわかるようになると、生まれ育った環境が違って感情には通じあう部分があることに気づき、他者の視点から集団の一員として自分をとらえ直せるようになるということ。

4 自分自身のことを他者がどのように理解しているのか伝えてもらうことで、それまで自覚していなかった自身の特徴を知ることができ、興味をもって自分を見つめ直すようになるということ。

(カ) —線5「対話によって、価値あることを明確化できる」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ものごとが価値づけられている理由について考え、自分の体験をもとに導き出した答えをやり取りすることで、誰もが受け入れられるような価値を見いだすことができるということ。

2 ものごとに価値を与えるための要素について考え、さまざまな人の考えを擦りあわせて一つにまとめることで、誰も想像できなかった新たな価値観を生み出すことができるということ。

3 ものごとの価値のうち時代を経ても変わらない部分について考え、互いの考えを交換して結論を導き出すことで、価値を判断するための基準が集団で統一されたものになるということ。

4 ものごとに対してもっている個人の価値観について考え、互いの体験をもとに話しあって共通する経験を見つけ出すことで、相手の価値観を受け入れられるようになるということ。

(キ) 本文について説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 対話関係がなく存在の承認が不足している日本の現状を説明したうえで、「想い」を聴きあうことで存在の承認が成立することを強調するとともに、話を聴く際に注意すべき点についても論じている。

2 対話関係は自由と承認を両立させるために必要だと述べたうえで、対話関係をつくる際に重要な技術について説明するとともに、対話が自己理解や価値の明確化につながることも論じている。

3 対話関係をつくれれば「想い」を受けとめてもらえるようになることを説明したうえで、価値観が個別化した日本の社会で対話関係を構築する難しさを述べ、対話の技術を高める手立てについて論じている。

4 対話関係は価値観の異なる相手との衝突を避けるために有効だと述べたうえで、対話関係をつくるためには自己理解が必要であると説明し、自己理解を深めるために重要な視点について論じている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

常陸(注)の国、麻生あさぶの里に手賀幹直てがみきなおといふ人、あざな(注)歌志久かしくとなんいひける。あるとき庭の草むらに蛙かへるの鳴く声おもしろきままに、障子引き開け、端居アしてうち聞きつつ、遣水(注)の濡そぼつる音、築山つみやまのけはひに風そよぐさまなどうち見やりて、心を澄ますをりから、草むらのうちよりひとつの蛙、ことごとしく飛び来て縁(注)にのほりて、歌志久が膝のもとにうづくまる。はかまの汚けがるべう思ひて取りて捨つれば、また縁の上に飛びのほりて、こだみははかまの間に隠る。あやしと見るほどに、また草の中よりひとつの蛇の頭もたげつつ出で来て、ひたみちこなたを目離れせずうちまもり、縁のもとにためらひつけたる。小さきものから恐ろしげに見ゆ。さてはこの蛙こそ、この蛇に追はれて逃げ来つるならめと思ひとりてければ、しきりにあはれになりて助けまく思ひにたり。やがて蛇のあるかたに顔うち寄せて、「汝(お前)今蛙を食まんはとす。我は蛙を助けまく思ふなり。蛙我が池に住めば、汝もまた我が庭の草むらに住めり。汝も蛙もともに我が家に住む友ならずして何とか思ふ。我蛙を愛しつれば、汝をもまた愛せずやある。汝蛙を食まば、我また汝を殺しつべし。汝蛙を食むことやすからましかば、我また汝を殺さんなに何かはあらん。汝蛙を助くべくは、我また汝を助け、常にもの与へて食ますべし。汝これをば守らば、我また誓ひて違はまじ。汝かまへて蛙を食むことをとどまるべし。」と繰り返して言ひければ、かの蛇ただくるとうづくまり居りし。やがてのどやかに這ひ出でて、築山の繁みに入りて、後ふつに出で来ず。さながら蛙はなほ恐るる心や残りけん。しばしは縁の傍らにかがみ居たり。さて夕べになりて、もろもろの蛙の鳴きけるとき、やうやくおぞおぞ這ひ出でて、池の中に飛び入りてともに鳴きぬ。

〔猿著聞集〕から。

(注) 常陸の国、麻生 現在の茨城県の地名。

あざな 本名ではない呼び名。

遣水 庭園などにつくった水の流れ。

築山 庭園などに石や土を盛ってつくった小山。

(ア) 線ア、エの中から、他と主語が異なっているものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ア
- 2 イ
- 3 ウ
- 4 エ

(イ) 線1「あやしと見る」とあるが、「歌志久」がそのように感じた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 庭に投げ捨てた「蛙」が、再び「歌志久」の近くに寄ってきて隠れようとするから。

2 庭にいたはずの「蛙」が、「歌志久」のそばにやってきて、大きな声で鳴き始めたから。

3 一度は庭から出て行った「蛙」が、慌てて「歌志久」のいる縁側に戻ってきたから。

4 縁側にいるはずの「蛙」が、「歌志久」に見つからないように隠れてしまったから。

(ウ) 線2「助けまく思ひにたり。」とあるが、「歌志久」がそのように思った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「蛙」がじっとしたまま動かないのは、「歌志久」が放り投げたことで弱ってしまったからだかわかり、申し訳なく思ったから。

2 「蛇」が草むらから出てきたのは、空腹に耐えかねて「歌志久」にえさを求めているからだと推察し、かわいそうに思ったから。

3 「蛇」が縁側近くをうろついているのは、先に縁側にのぼった「蛙」をねたんでいるからだと感じ取り、あわれに思ったから。

4 「蛙」が縁側に入ってきたのは、草むらから出てきた「蛇」に追われているからだということに気づき、気の毒に思ったから。

(エ) 線3「汝これをば守らば、我また誓ひて違はまじ。」とあるが、それを説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「蛇」が「蛙」を追うのをあきらめて愛情深く接するのであれば、「歌志久」も「蛇」を友として認め、縁側にのぼってくることを許可すること。

2 「蛇」が「蛙」と和解して共に暮らすのであれば、「歌志久」も「蛇」に対する怒りをしずめ、安心して暮らせるように庭の草むらを整備すること。

3 「蛇」が「蛙」を安心させるために庭から出て行くのであれば、「歌志久」も「蛇」のことを許し、捕まえて命を奪うことはしないと固く誓うということ。

4 「蛇」が「蛙」を食べないと決心するのであれば、「歌志久」も「蛇」の命を奪うことはせず、いつも食べものを与えるという約束を必ず守るということ。

(オ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「歌志久」が仲介したことによって、「蛇」と「蛙」は争いをやめて互いが納得するまで話し合い、庭で平和に共存するための方法を見つけ出した。

2 「歌志久」が「蛇」を根気強く説得したところ、「蛇」は「蛙」を食べようとする気持ちをしずめずうずくまり、やがて築山の繁みに戻っていった。

3 「蛇」は「歌志久」の考えを聞いて心を動かされたふりをして、築山の繁みにひそみ、池に戻ってくる「蛙」を襲うための機会をうかがっていた。

4 「歌志久」が夕方になってから「蛙」を庭に放つと、「蛙」は「蛇」がいなくなったことを喜んですぐに池に飛び入り、仲間とともに鳴き始めた。

(問題は、これで終わりです。)

